

# 令和4年度（2022年度）の瀬田川のシジミ資源モニタリング

石崎大介

## 1. 目的

シジミの漁獲量が低迷している瀬田川では、漁協を中心とする活動組織が、近江大橋以南の南湖および瀬田川でシジミの生息密度調査等を実施している。そこで現場では調査結果の解析に加え、肥満度を測定することにより、シジミ資源状況を評価した。

## 2. 方法

本調査は2017年から開始され、原則として4～12月に毎月実施されている。活動組織が調査地点とする20地点のうちの3地点において、貝搔網3曳網で採捕されたシジミの個体数と殻長を調査した。採捕されたシジミは2mmの篩で選別して残ったもののみを対象とした。殻長組成から年級群分解を行い各年級群の個体数を推定し、搔網面積を0.6m<sup>2</sup>として生息密度を推定した。また、採捕された18mm以上の親貝の肥満度を3地点で各月12個体ずつ測定した。加えて、琵琶湖環境科学センターがホームページで公表している瀬田川のプランクトン量との関連を考察した。

## 3. 結果

前年生まれの2021年級が7月から採捕された。その密度は8月のピーク時で1011個体/m<sup>2</sup>であり、2016年級や2018年級と比較すると少ないものの、2017年級、2019年級、2020年級と比較すると多かった（図1）。これは産卵期である2021年の5、6月の親貝の肥満度が調査を開始した2017年以降2番目に高い4%を超える値であったことが要因であると考えられる（図2）。また夏の大きな減耗は確認されなかったが8月から12月にかけて徐々に減耗した。一方で2022年の親貝の肥満度は5月は調査開始以来最も低く3.2%であり、6月は調査開始以来2番目に低く3.5%であっ

た。肥満度上昇に重要な2021年の秋季には珪藻の発生量が多く、この時期に肥満度の大きな上昇がみられたが、2022年産卵期の肥満度は低かった。この要因は不明であり、2023年（2022年級）の発生が心配される。

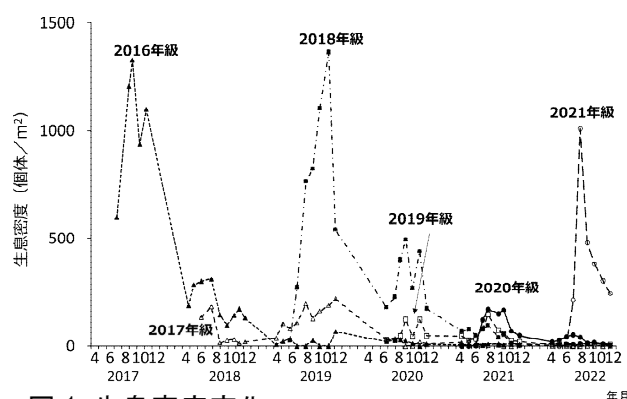


図1 生息密度変化

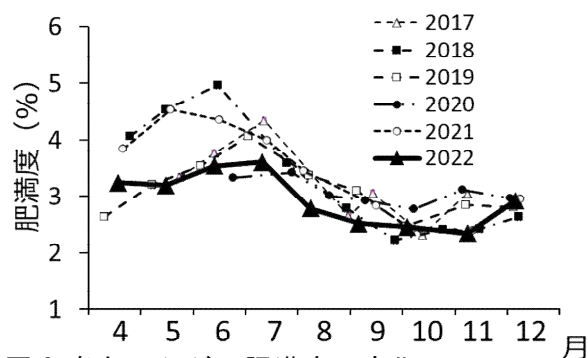


図2 各年のシジミ肥満度の変化